

平成 28 年 2 月 17 日 (水)





崇城大学大学院  
芸術研究科委員会

研究科長 本 間 康 夫 殿

論文審査委員  
主査 関根 浩子



論文審査結果の報告 (甲)

論文提出者	西村佳菜子 (1321D02)		
論文題名	明治期における「陶彫」の創始とその後の展開に関する研究 ―寺内信一と沼田一雅の比較を中心として―		
審査委員	主査教授	関根 浩子	
	副査教授	本間 康夫	
	副査教授	楠元 香代子	
	副査 筑波大学名誉教授(外部査読者)	中山 典夫	

【論文の要旨】

明治期に西洋の彫刻作品や技法が日本に紹介、導入されることで、陶土を素材として焼成によって「彫刻」(塑造)作品を制作するという新しい試みが開始され、その試みは今日の塑造制作者の一部にも引き継がれている。しかし、後に「陶彫」と呼ばれることになるこの日本の窯芸史上、美術史上の新しい試みについては、未だ本格的な研究はなされていない。

申請者は、陶製彫刻に対する彫刻制作者としての興味から、「陶彫」研究を学位論文の題目とすることにし、上述のような「陶彫」研究の現状に鑑みて、①「陶彫」の創始者が誰であるのか、また、②その創始者がいつ、いかなる理由で「陶彫」制作を開始したのか、さらに③「陶彫」という用語はいつ頃から使用され始めたのか、④「陶彫」開始に関係するキーパーソンの没後、陶彫はどのように展開し、またキーパーソンの1人が望んだ日展における「陶彫」部門の確立は実現されたのか否か、という基礎的かつ根本的な事柄を解明事項として設定した。本論文は、それら4つの問題点を解明することを目的として、以下のような構成で展開されている。

まずI章では、古代から明治初期にかけての窯芸の展開と、再現対象(形象)を持った陶製の造形品の主題的、技法的、造形的特徴の流れを、4節に分けて時系列で概観するとともに、それらの概観結果を表に整理してわかり易く示し、後章における「陶彫」の開始とその開始者に関する検証や考察

の前提としている。

続いてⅡ章では、明治期の日本において新傾向の陶製作品を制作した2人のキーパーソンのうちの1人で、「陶彫」の創始と深い関わりがあると想定される寺内信一を取り上げ、彼の生涯や教育、制作、出版活動等の概観や、先行研究や弟子たちの略歴や作品等についての検証や分析、解明を行うことで、彼の日本近代美術(教育)界や窯芸界、産業界における功績の解明と位置付けを試みている。

またⅢ章では、明治期において新傾向の陶製作品を制作したもう1人のキーパーソンであり、「陶彫の父」と呼ばれている沼田一雅を取り上げ、彼の生涯や教育、制作、作家団体設立・運営活動等の概観や、先行研究や弟子たちの略歴や作品等についての検証や分析、解明を行うことで、彼の日本近代美術界や産業界における位置付け、並びに弟子たちへの影響の解明を試み、次章における寺内信一との比較、分析の前提としている。

次いでⅣ章では、「陶彫」の真の創始者や「陶彫」を開始した理由とその時期、「陶彫」の用語の使用の開始期を解明するため、キーパーソンと想定される寺内信一と沼田一雅を、生涯や功績、主な弟子とその作品、また美術界や産業界、美術史や工芸史、産業史上における位置づけ、さらに作品の造形的、技術的特徴や、芸術観、思想という諸点から比較、分析している。また本章においては、先行研究の諸定義を検証し、申請者自身による「陶彫」の再定義も行われている。

終章となるⅤ章では、2人のキーパーソンが没した後の大正期以降の「陶彫」の展開を、寺内と沼田が弟子たちの作品に与えた影響の分析を通して跡付けようとしている。また、沼田が望んだ日展(帝展、新文展含む)における「陶彫」部門の確立の有無については、日展図録や日本陶彫会展覧会(陶彫展)案内状等の渉猟や分析によって解明を試みている。

そして最後の結語においては、各章における概観や検証、分析結果を基に、冒頭で掲げた4つの主要な問題に対する申請者自身の結論を示し、併せて今後の申請者の研究課題の提示を行っている。

## 【審査結果の要旨】

### 〔論文評価〕

本論文は、以下のように構成されている。

#### I 章 明治初期までの日本における陶作品ないしは陶製品

はじめに

1. 古代における窯業の展開と再現対象(主題)を持った陶作品ないしは陶製品の遺例
2. 中世文化(鎌倉文化から室町文化まで)における窯芸の展開と再現対象(主題)を持った陶作品
3. 近世文化(安土桃山文化から江戸文化まで)における窯芸の展開と再現対象(主題)を持った陶作品
4. 開国から明治初期までの窯芸の展開と再現対象(主題)を持った陶作品ないしは陶製品の遺例(寺内信一の陶彫制作開始直前まで)

結 論

#### Ⅱ 章 明治期の日本における新傾向の陶作品ー寺内信一の功績と作品・先行研究・弟子ー

はじめに

1. 寺内信一の生涯と功績
2. 寺内信一に関する先行研究と美術・産業史上における位置付け



3. 陶土との出会いと常滑美術研究時代の寺内信一の唯一の現存作品
  4. その他の寺内信一の作品
  5. 寺内信一の弟子の作品
  6. 寺内信一の関係者作品
- 結 論

- Ⅲ章 明治期の日本における新傾向の陶作品－沼田一雅の功績と作品・先行研究・弟子－
- はじめに
1. 沼田一雅の生涯
  2. 沼田一雅に関する先行研究と美術・産業史上における位置付け、作品評価
  3. 沼田一雅の作品の変遷とその特徴
  4. 沼田一雅の弟子の作品
- 結 論

- Ⅳ章 「陶彫」の創始者と開始期再考
- はじめに
1. 寺内信一と沼田一雅の生涯の比較
  2. 寺内信一と沼田一雅の美術・産業界、美術・工芸史、産業史上における位置付け
  3. 寺内信一と沼田一雅の造形力・技術力の差異
  4. 寺内信一と沼田一雅の芸術観・思想の相違
- 結 論

- Ⅴ章 大正期以降の「陶彫」の展開
- はじめに
1. 大正時代から現在までの日本における窯芸の流れ
  2. 寺内信一の影響が確認される作家とその陶彫作品
  3. 沼田一雅の影響が確認される作家とその陶彫作品
  4. 結 論

結 語

参考文献一覧  
図表

本論文の特徴と意義は、彫刻制作を主たる専門領域とする申請者が、さまざまな素材による過去の制作経験の中でも、「陶土」を成形、素焼きすることで生み出される温かみのある多様な色調や、釉薬がもつ独特の肌合いに魅せられ、現在では美術用語として定着した感のある「陶彫」に興味を持ち、先行研究が殆どないなか、無名に近い作家たちに関する窯元や美術館、博物館、遺族のもとでの作品・資料調査や聞き取り、文献の渉猟といった、美術史を含む人文科学の基本ともいえる調査・研究方法によって、「陶彫」をめぐる未解明の基礎的な諸問題に果敢に挑んだ点にある。

申請者が解明に取り組んだ主な問題とは、「論文の要旨」でも挙げた通り、主に4点である。すなわち、①「陶彫」の創始者、②「陶彫」の開始期と開始の理由、③「陶彫」という用語の使用の開始期、④創始者没後の「陶彫」の展開と日展における「陶彫」部門の確立の有無、である。

それら4つの問題を解明するため、申請者は論文全体を5章構成とし、まず1章で古代から明治初期までの日本の窯芸と陶土による形象品の流れと特徴を概観、分析し、長い歴史的展開を見せた「陶土」を用いた造形が、信仰や呪術用、副葬用、日常生活用といった用途をもった制作から離れて、純

粹に鑑賞目的、すなわち「彫刻」（芸術作品）として制作される時期を見定め、また、前近代の形象品と近代のそれを隔てる違いについては西洋彫刻の洗礼の有無にあると結論付けている。続くⅡ章では、明治初期までとは異なる新傾向の陶土焼成による彫刻作品を明治期に制作し、「陶彫」の創始に深い関係があると想定される2人のキーパーソンのうちの1人で、生年の早い寺内信一をまず取り上げ、有田や常滑の窯元や美術館や資料館での現地調査と文献渉猟によって、彼の生涯とその功績、先行研究や作品、並びに弟子達の略歴や作品を概観、分析し、彼が新傾向の陶土焼成作品を開始した理由やその時期も解明している。次いでⅢ章では、「陶彫」の創始にがあると想定される明治期のもう1人のキーパーソンであり、現在「陶彫の父」と呼ばれている沼田一雅を取り上げ、やはり福井県や東京での現地調査と文献渉猟を基に、彼の生涯とその功績、先行研究や作品、並びに弟子達の略歴や作品を概観、分析し、彼を最初に「陶彫の創始者」と呼んだ人物や、「陶彫」という用語の使用の開始期も特定している。そしてⅣ章において、キーパーソンである寺内と沼田を諸点から比較することで、「陶彫の父」とされる沼田より寺内の方が16年早く陶製の塑造制作を開始していることを根拠に、厳密な意味での「創始者」を寺内と結論づけるとともに、沼田に対して彼が未だに無名に近い理由も明示している。さらに、先行研究の分析と自身の経験に基づいて「陶彫」の定義を再考し、申請者自身による定義も行っている。最後のⅤ章では、2人のキーパーソンの没後に当たる大正期以降の「陶彫」の展開を、佐賀県の窯元や常滑の各所での弟子たちの作品調査や文献渉猟を基に跡付けるとともに、沼田が望んだ日展(帝展、新文展含む)における陶彫部門の確立については、日本陶彫会の案内状の出品者一覧や日展図録を渉猟、確認することで、未だに確立されていない上、今後も確立は難しいと結論づけている。そして結語においては、各章における概観や検証、分析結果を基に、冒頭で掲げた4つの問題に対する申請者の結論と今後の申請者の研究課題を示すとともに、研究成果を自身の作品制作に反映させることも約している。

本論文は以上のように構成されているが、その中には、学位論文の提出に先立って投稿し審査に合格した2篇以上の単発論文(本論文には3編挿入、うち1編は学会誌掲載)も適切に盛り込まれている。また、学位論文に要求される論文の構成、すなわちほぼ同じ文量からなる各章がそれぞれ独立を保ちながら、しかもすべての章が互いに関連し合って最後の結論へと収斂していく、という構成も達成している。さらに、殆ど先行研究がないテーマと陶彫家を独自の視点で取り上げているため、いずれの章にも新規性が含まれており、問題点の解明方法も使用している用語も人文科学の基本的な方法や用語に則した妥当なものであると言える。

研究期間の限られた甲種の論文として、もちろん限界はあるものの、本論文は以上の諸点から評価に値する労作と言え、今後「陶彫」研究を行う上で参照されるべき基本文献の一つになることは疑いない。

#### [最終審査結果]

平成27年10月9日(金)の予備審査後、平成27年12月1日(火)(本審査)、並びに平成28年2月2日(火)(公聴会後の口頭試問)に、芸術研究科委員会において論文審査委員会による2回

の口述試験を実施し、申請者の論文につき説明を求め、関連事項について質疑応答を行なった結果、委員全体一致で合格と判定した。

**[結 論]**

よって、申請者は博士（芸術）（甲種）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。